

千葉にて開催か

本年はその第五回にあたるが、昨年十一月東京で開催された第四回ゼミによつて医学生ゼミの大略を知ることが出来た。

医学生ゼミの機構は医学連書記局と実行委員会から成立つてゐる書記局でまず周到な計画を立て、それを主管となつた大学の学生を主として構成された実行委員会が層々と実行に移すのである。昨年は東京医歯大が主管となり、全国

会によつて討議、決定される。昨年は一昨年に引続いて「日本の医療の現状と政府の社会保障政策」をテーマに取上げた。このテーマを決めたことに実行委員会ではこういつてゐる。「医学は理論科学であるとともに実験科学であり応用科学でもある。しかし社会への正しい認識がなくては国民のほんとの幸福に役立たない。だから

日本医師会館講堂に移して、日本医師会常理事丸茂重貞氏の「日本における医療と医療制度の変遷」大阪市立大、教授近藤文二氏の「日本の医療政策」、法政大講師吉田秀夫氏の「医療保障の現状と題——政府の医療政策について——」という講師団の講演の後、医療保障の将来、社会保険一本化の問題、医局制度などに焦点が絞られ、活発な質問、討論が行われた。

1000

骨ざらし堀の水槽の上で桜花が舞っている。さらに堀をかくれた小池前学長も、新潟大学顕微鏡の權威であつたのみならず、市の大きな給水塔がそびえている。物ごとは時の流れと共にこのようにかわつてくる。

第一講座教授兼大学学長として学生の教育に、また大学の興のために不滅の金字塔をきつて、それで購入した諸器械もやがて到達することになる。

学会において細胞学及び電子

つたかということを知語る。第 萩野の三助手が家族的雰囲気、ず、学内でも人気教授の二人で、二つよの第三助手は既に着鼻のうちに、学生の指導に専らあつた森田教授の「二つよ」

新館に移つてしまつた。昔日の研究に余念がない。「自分は、大いに研究を続けてゆきます」と教授兼教授研究室であつた一棵ど頭の悪いものはない」というのなかにすむ第一講座もこの夏ことを名刺代りに入室してきたまでに新館に移り、その二階大学院学生の川名君が、あにはには三つの解剖学教室が住時のからんや秀才中の秀才であることが再び集るようになる。解剖とがわかつて教授以下みなのも、実に三十有余年におよび、学内でも教授会のかなりの方々が学

医学・看護学生の各分科会・運動部親観会などが東京医歯大講堂で開かれた。千葉大医学部からは「東洋医学の精神についての考察」

昨年度の第四回ゼミの成果とそ

の欠陥については、第四回全国医学生ゼミナール共同デスクによれば、次の通りである。

と題して、東洋医学研究会の小林堯夫君が、人間の生命現象の精密な觀察に基づいて疾病を局部にとらわず、常に全体の重みとして

成果としては、(一) 社会保障

の本質論を明確にできた点、実行委員会が出した第四回ゼミの基本方針は現行医療保障の実態を明ら

てもらえるという東洋医学の精神について述べた。更に社会医学研究会では「農夫症」という題目の下に完全な農業中心の加茂村をそのフィールドとして一昨年より活動を開始したが、農夫症というテーマに取組む前提としてその村の性格を把握するために村青年団、村役場と協力して行った農村生活の終始した感があつた。第四回ゼミ

健康診断の総まとめを発表した。一方、他大学では、東京医歯大の「P32をトレーサー」として見たる血液高電圧濾紙電泳泳動像の含P32劃分、血球内含P32の同定、肝臓ホモジネート高電圧濾紙電泳泳動像の含P32劃分、肝臓ホモジネート内含P32物質の同定について

では医療保障の本質論を——それらを単に理念としてとらえるのではなく、現在までの歴史的、社会的背景を明確にし、更に日本の資本主義社会の構造の解明にまで進んで、社会保障のあるべき姿について不完全ながらも追求を試み——明確にできたことは大きな成果で

「鹿大の」ムタヒータ型変異菌に
おこた
（二）各分科会が盛況であつたこ
ととは今後の内容を深める上で明る
い希望がもてること、及びゼミの
近の肺吸虫患者の分布調査」、鹿
児島大社医研の「鹿児島県枕崎市
生として購読をうけられている
生と記念の祝賀会で「先生の試
しである。頭髪一本も乱さぬ鈴し

願を一回でパスした」というこ
 とを特に強調された教授がおら
 れたところを見ると、あるいは
 落第された教授がおられたのか
 もしれない。もしそうであるな
 ら人生には味がある。先生の秘
 木隆之助教授と、これはまたい
 がくり頭の下沢助手の名コンビ
 で、今年も後期発生のいくつか
 の難問が次々と解明されていく
 ことだろう。将来の発展が大い
 に期待されている。

蔵弟子である永野助手が、アメ
リカ留学を前にして黙々と研究
を続けている。解剖学会の理事
長代理として学会の発展に多大
の寄与をされた、第三講座の鈴
木重武教授が、白血病でなくな
れてから久しくなる。田圃に蛙
の卵が現れるや、とたんに急が
る。かくこれほどつらい学問はない
だろう。ところが教える方にと
つてもこれはなかなか容易なら
ざる学問である。基礎医学のな
かで最も古い歴史を持つという
宿命に徒つて、医学の他の領域
特に臨牀方面の基礎知識とし
て、人体の構造のあらましを、
あまり褒めばえもなく、くる年

歌やかに開催

去る四月十八日(土)一時半より学生会館において恒例の新生歓迎会が自治会主宰の下に整然と開催された。会館には医学部専門課程、医進コースの上級生及び新生生約三百五十名がそれぞれ学年別に席席、武内係長の司会によつて先ず谷川医学部卒より祝辞が述べられ、次いで出席の加賀(法医)、鈴木(生運)、福田(生運)、川喜田(細園)、三輪(内科)の各教授からユモアとウィットに富んだ挨拶がこもこも述べられ、学生たちへ深い印象を与えた。次に綿貫(外科)、長谷川(産婦人科)、藤本(病理)の各助教が短りながら好感あるスピーチを行った。

自治会からも中田君(医四)が祝辭を述べ、新入生代表として玉置哲吉君(医一)が起つて、新人らしいフレッシュな謝辭を述べて式の次第は修了したが、その後音楽部、山岳部の合唱などもあつて会は和やかな雰囲気うちに、滑りなけ終了した。

昭和三十四年度の入学試験も激烈な競争の後、やつと一段落したが、本年度の全體的傾向としては、本年度の全體的傾向としては、女子学生と現役の増加といわれている。本学にもやはりその傾向が反映して、医進課程では志願者八百四十八名、入学許可者八百五十五名であるが、昨年の現役十一名、女子学生四名に比べて、本年は現役二十一名、女子学生十名の多きで進んでいる。専門課程補充入学に上である。

女子現役の合格率増加

昭和三十四年度の入学試験も激烈な競争の後、やつと一段落したが、本年度の全體的傾向としては、本年度の全體的傾向としては、女子学生と現役の増加といわれている。本学にもやはりその傾向が反映して、医進課程では志願者八百四十八名、入学許可者八百五十五名であるが、昨年の現役十一名、女子学生四名に比べて、本年は現役二十一名、女子学生十名の多きで進んでいる。専門課程補充入学に上である。

医進コースの上級生及び新入生約二百五十名が、それぞれの学年別に辞席、武内係長の司会によつて先ず谷川医学部長より祝辭がのべられ、次いで出席の加賀谷（法医学）、鈴

昭和三十四年度の入学試験も激烈競争の後、やつと一段落したが、本年度の全體的傾向としては女子学生・現役の増加だといわれている。本学にもやはりその傾向が反映して、医進課程では志願者八百四十八名、入学許可者八百五名であるが、昨年の現役十一名、女子学生四名に比べて、本年は現役二十一名、女子学生十名の多き（一増し二減し）の専攻型補充入学（二増し一減し）である。

者は昨年の志願者百六名、入学許可の者十七名に對して、本年は志願者六十九名、入学許可者十七名であるから、競争率は半減しているといえよう。この中の本学関係者からの入学者はDコース一名、工学部一名、園芸学部一名、文理学部六名で、變り種としては、農学部、文学士の学士号を持つ、所謂「学士入学」者が一名つついる。

舊制學位授与者

(三十四年一月以降)

羽島護、大隅忠義、樺方文世、永原謙治、赤松暢、瀬戸屋健三、伊東幸雄、奈良四郎、高山宣夫、松岡淳夫、三谷三寿美、柴田千葉男、戸叶公明、鬼頭康之、石井明和、中田秀明、本間秀一、山本邦雄、久我哲郎、平田正雄、村越善衛、山崎、小倉保巳、河井倫三、中塚木清一、川野元茂、伊藤良昭、村山勇、海保敬一、波辺良彦、榎原雅敏士、石橋源三、中村重徳、大西誠、方波兒猛、緒方肇、中村真佐富士夫、梶沢英正、波辺誠介、中山重男、青木太三郎、植田尚男、若山芳雄、松本清一、若原隆、斎藤宏、松本龍二、川辺兼美、古川政政、宗健六、武田清一、波辺西四郎、朝岡威親、佐々木周三、篠原三郎、綿貫重雄。

入学者氏名

昭和三十年度入学の第一回大学
院入学者の十五名は、本年全員揃
つて学位論文が通過し、栄ある第
二回の博士号を獲得した。新博士
連の名前は次の通り。

四月二十四日、会議室にお
自治会連合委員
田中 明（
十四年度自治委員会が行わ

神經科 赤松亘 石川行一
佐藤尙信

長らく同窓会の事務を担当され、内外同窓の間に親しまれてい

年度役員が次の通り決定し	邦男	小児科	新美仁男	吉松彰
長 小幡 五郎(医三)	長谷川修司(医三)	外科Ⅰ	菅谷健彦	常泉吉朗
員長 深谷 邦男(医三)	寛人(医一)	外科Ⅱ	磯野可一	西村明
医一より選出予定		整形外科	辻陽雄	平山守
連中央委員 松江 寛人		産婦人科	武田敏夫	時永達巳
	常任委員	眼科	田辺正義	
	医四 田中明 高橋			
	医三 長谷川修司 未定			
	医一 穴倉 松江 寛人			

金坂 靖氏は、名簿の改訂、同志会記念事業の達成、学術会議議員選挙体制準備などに忙しいときではあるが、このたび老齢の故をもつて惜しまれつつも退職された。

